

牛群検定通信 No126

～子牛の寒冷対策はお早めに～

暑い暑いと言っていたら、いつの間にか秋も深まりました。富士山や日本アルプスでは、そろそろ初雪の季節です。みなさんの牛舎に寒い北風が吹き付けるのももうすぐです。今回は子牛の寒冷対策をチェックしてみましょう。子牛の寒冷対策は、死亡事故回避につながる大事なものです。

1 子牛は寒さに弱い

乳牛は寒さに強いと言われていますが、それは大人の牛のことで、子牛は大変寒さに弱いものです。大人の牛はルーメン（第一胃）が発達し、そこから反芻による発酵熱が得られます。これは、いわばカイロを体内に持っているようなものです。反面、子牛はルーメンが未発達であり、反芻も行わないことから発酵熱は得られません。ルーメンが発達する3カ月齢位までは、特に注意が必要です。一般には最低気温が13度を下廻ると子牛の死亡事故が増えると言われています。

2 気温

寒冷による子牛の事故は、気温が13度以下になると発生すると言われています。ここで注意すべきは13度という気温の考え方です。これは平均気温とか、日中の気温ではありません。最低気温を指し、一般には早朝の明け方の気温を指します。ですので、例えば南国の鹿児島県でも10月には13度以下を記録します。北海道、東北は、当然もっと早く9月には13度以下となる日があります。全国の気象状況は、当団HPのカウダスで詳細に知ることが出来ますので、ご参照ください。（「カウダス」で検索）

3 子牛の事故を検定成績表で知るには

検定成績表の裏面の「年間子牛生産状況」の中の（１）牛群検定における分娩状況から、年間に事故で失っている子牛の状況がわかります。

①死産

分娩立会していない場合、分娩直後のケアが無く、その後に死亡した状態で発見されれば、死産として報告されます。冬季に増える傾向があります。都府県の平均で５％程度ですので、越える場合は分娩管理を再確認してみてください。

②推定新生子牛早期死亡

分娩が牛群検定で報告されたものの、個体識別（耳標）で出生報告が行われていないものをまとめたものです。分娩後１週間程度で子牛が死亡したものと推定されます。やはり冬季に増える傾向があります。都府県の平均は４％程度ですので、越える場合は、初乳の給与や保温等を再確認してみてください。

3 子牛管理のポイント

①初乳：生後６時間以内に２リットルを２回（計４リットル）を給与

②保温：ジャケット、ウオーマー、乾燥した清潔な敷料、ヒーターなど